



文壇ものしり帖 ◆ 巖谷大四

河出書房新社

文壇ものしり帖

昭和五十七年一月十日 初版印刷
昭和五十七年一月二十日 初版発行

巖谷大四（いわや だいし）
大正四年、東京に生まれる。

児童文学者・巖谷小波の四男。

早大英文科卒業後、文芸家協会

書記、鎌倉文庫出版部長、「文藝」

編集長を経て文筆生活に入る。

著書に「非常時・日本文壇史」

「戦後・日本文壇史」「文壇紳士

録」「波の発音―巖谷小波伝」

随筆「父と子」「物語女流文壇史」

「文壇一夕話」など多数。

著者 巖谷大四

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―二〇一（営業）

四〇四―八六一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷

製本 小泉製本

©1981 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

ペンネームの話 7

鷗外・森林太郎 荷風と藤村 「くたばってしめえ」 土地にちなんで 「おあしがない」

花袋とは？ 本名の作家たち 大衆文学畑では かくれみものとして

江藤淳「ペンネーム考」より 昭和そして戦後

文壇酒話・明治大正篇 29

露伴と北海道 紅葉と佐渡 漱石の弟子二話 硯友社の新年宴会 一葉の日記より

啄木の酒 こう命、杜吉命 恋愛時代 犀星の喧嘩酒 のどかな時代 向島松寿園

「文士の目刺し」 どん底の底の底 失恋酒

文壇酒話・昭和篇 68

「無銭飲」？ 枕席の涙酒 アナ・ボル時代 文学(?)道場 女と戦争

「金陵」か「司牡丹」か？ 恐るべき子供・吉行エイスケ 潤一郎と春夫の友情 一人一円五十銭

同人雑誌の気概 別離と逃走 葛西善蔵と嘉村磯多 軍人と文士と新聞記者

国民酒場の時代 里見弴のバイタリティ 大仏さんとビール 水割ストロベリー

「日本文学報国会」余聞 希望のカストリ

文士の食道楽

127

硯友社と紅葉館

紅葉の魚好き

何でもたべた志賀さん

うるさかった谷崎さん

『食卓の情景』と『私の食物誌』

『目と耳と舌の冒険』と『カワハギの肝』

作家とペット

137

吾輩は猫三代

漱石は猫より犬

「文鳥」

十七人の子沢山

目白鳥と小雀

小鳥を愛した作家たち

作家と釣り

159

釣仙露伴

粹人垢石

井伏鱒二の「白毛」

「鮎とたなこは うれしいなあ」

首をつるか、魚をつるか

殿様釣り

文士の癖さまざま

176

原稿用紙のこと

万年筆・鉛筆・ペン・Gペン・毛筆

「昔語り」——年賀状今昔

漱石の年賀状

作家と「雑話」

作品とモデル

198

「金色夜叉」

「不如帰」

「婦系図」

「春」

二代目文士たち

215

父の死が転機

鷗外の子女たち

広津家三代

恐怖が畏敬に変わるとき

詩人の父、作家の娘

太宰と英光の血筋

各分野に浸透する才能

二代目作家の正念場

東京文壇昔話

232

仮名垣魯文と「仮名読新聞」

尾崎紅葉と「硯友社」

透谷、藤村たちと「文学界」

坪内逍遙と「早稲田文学」

荷風教授と「三田文学」

漱石山脈

あとがき

装幀 巖谷純介

文壇ものしり帖

ペンネームの話

鷗外・森林太郎

ペンネームと言っても日本の場合、雅号、筆名、匿名の三種類がある。雅号の場合は自分の名前をもうすこし優雅にみせるとか、芸術家らしく装うとか、とにかく風情のあるようにすること
が普通だが、筆名の場合、自分の本名を出してはいろいろと都合が悪いことがある人、たとえば会社勤めしていて、余暇を盗んで小説類を書いている人、あるいは左翼の作家がカムフラージュのためにするといった場合が多い。それは匿名にも近いものだが、匿名となってもっと徹底して、XとかYとか符号に近いものと言っていいだろう。完全に己れを匿すというやり方である。
ろう。

時代的に見ると、明治の作家が一番よくペンネームを用い、大正になると本名が多くなり、昭

和に入ると、またペンネーム（とくに筆名）が多くなるようだ。

ところで、日本の近代文学で一番沢山ペンネームを使った人は、私の調べたかぎりでは森鷗外
のようである。こころみに挙げてみる。

森鷗外（一八六二—一九三二）本名林太郎、別号鷗外漁火、千朶山房主人、牽舟居士、觀潮樓主人、頭微齋主人、侗然居士、參木舎、五木生、転丸堂主人、忍岡樵客、縁外樵人、湖上逸民、台麓学人、小林紺珠、鐘礼舎、浮漚氏、須菩提、良崖、隠流、妄人、挾書生、ゆめみるひと、腰弁当、婦休庵、芙蓉、銚坂居士。姓は源、諱は高湛（たかしずともいう）。

さて、この「鷗外」という奇妙な雅号のいわれであるが、『座談会明治文学史』（岩波書店）の中で、柳田泉が次のように語っている。

「……西氏（註Ⅱ西周・森家の親戚にあたる百科全書啓蒙学者）の日記というものをみましたときに、林太郎（鷗外）がどうも女に惚れっぽくて困る、うちの女中をおっかけてしようがない、ということを書いています。子どものときだから、十いくつでしようが、それでその女中のほうが一つか二つ年上なんです。その女中を追っかけてしようがないので、西氏はどうもこの女中が気に入っていたらしいが西氏も困って鷗外が夢中になって追っかけるので、それに暇をやっていることがあるのです。ところがその女中の名前がお梅さんというので、号についての俗説がそこからもでているので、鷗外の号がこれに関係するのだという。お梅さんが即ち小梅（註Ⅱ深川小梅町）、そのころ竹屋の渡しといった渡しの上に鷗の渡しというのがあったが、——吾妻橋の少し上にあたるのですが——鷗の渡しの外が小梅であるというので、そこで鷗の渡しの鷗をとって鷗

外とつけたのだという俗説が伝わっているくらい、お梅さんという女性のことを長く忘れないで考えておったということも伝えられているのです」

荷風と藤村

同じようなケースで、自分の初恋の女にゆかりのある号をつけたのは永井荷風である。

永井荷風（一八七九～一九五九）本名壮吉、別号断腸亭主人、石南居士、鯉川兼待、金阜山人。

この人、尋常中学の二、三年の頃（十六、七歳）瘰癧を治療するため、下谷の帝国大学第二病院に入院した。その時の付添い看護婦に心を惹かれた。荷風の初恋の人である。その看護婦の名はお蓮れんと言った。そのお蓮に近いものをと考えた末、荷風（荷の字ははすの意味がある）とつけた。その号をつけて、看護婦への片恋の悲しみを書いた小説が処女作「薄衣」（広津柳浪との合

作名義で明治三十二年十月号「文芸倶楽部」に載った）である。

島崎藤村

「十六七のころ、わたくしは病のために一時学業を廃したことがあった。若しこの事がなかったなら、わたくしは今日のように、老に至るまで閑文字を弄ぶが如き遊惰の身とはならず、一家の主人おんしともなり親ともなって、人間並の一生涯を送ることができたのかも知れない」と、随筆「十六七のころ」に書いている。



島崎藤村も、その号は多少初恋の女にかかわりがある。

島崎藤村（一八七二～一九四三）本名春樹。別号古藤庵無声、枇杷坊、無名氏。

藤村は、初期「文学界」同人になる前、巖本善治の主筆する「女学雑誌」に翻訳や英語の紹介などを発表する時は、無名氏という筆名（匿名）をつかっていた。「文学界」の出る頃から一年ばかり、佐藤輔子との初恋にやぶれ心の傷をいやすため、関西方面や東北方面に旅に出たが、丁度その頃李白や杜子美の詩を愛読していた。それで杜子美の詩の中に「古藤」という字を見つけ、それに庵の字をつけて古藤庵という雅号でものを書きはじめた。

「文学界」の初期には、古藤庵無声、枇杷坊、藤生などの筆名を使った。

そのうちにこれでは少し自分の年齢と不似合いだという気になり、大和路を旅している間に、芭蕉の藤の花の句「草臥て宿かる頃や藤の花」の句の心に思い合せて、その旅から帰って来てから藤村と改めた、というのが定説になっているが、そこにはまた初恋の人佐藤輔子の「藤」の字が頭にあったことも考えられる。佐藤輔子のことが念頭をはなれなくて、旅に出たのだから、どうしてもそれに関係があると思う。

「くたばってしめえ」

坪内逍遙（一八五九～一九三五）は、本名勇藏後に雄蔵。青年時代は、蓼汀、蓼汀于史、春の屋（春廼屋、春の屋主人、春の屋おぼろへ臚）などを使ったが、後に逍遙、逍遙遊人、そして晩年には柿雙（双）というのを使った。

逍遙はある日漢書を読んでいると、「逍遙遊」という言葉が出てきた。それが英語の Rambler (ぶらぶら歩く人) という意味にもとれるのが気に入ってつけたということである。またこれは「壺中に逍遙す」という意味も含んでいるという。

二葉亭四迷(一八六四〜一九〇九)は本名長谷川辰之助で、別に冷々亭杏雨、四明という号も使った。二葉亭四迷は「くたばってしめえ」をもじったものであることはあまりにも有名だ。

尾崎紅葉(一八六七〜一九〇三)は、本名徳太郎だが、この人は芝中門前町の生れで、近くに紅葉山という小高い山があったので、紅葉とつけた。芝には三縁山という山もあったので、縁山とも号した。他にこの人は、戯作堂、半可通人、愛黛道士、花瘦、源悪太郎、芋太郎、十千万堂、閑鼠という号もつかった。

幸田露伴(一八六七〜一九四七)は、本名成行。この露伴は、露を美しく好ましく思ったからで、

ほかに格別に深い意味はないと自ら語っている。別に、叫雲老人、蝸牛庵、雷音洞主、脱天子などがある。露伴の号をつかったのは出世作「露団々」の時からである。

夏目漱石(一八六七〜一九一六)は本名金之助だが、少年の頃から漢学の素養があって、漢籍『蒙求』の中の「漱石枕流」(石にくちすすぎ、流れに枕する)からとったものである。これはもと『晋書』の中の「当云欲枕石漱流」で、石に枕し流にくちすすぐ、が正しいのだが、



坪内逍遙

生来負け惜しみが強かったので、漱石としたと言われる。

斎藤緑雨（一八六七～一九〇四）は、明治時代、寸鉄人を刺す辛辣な批評家として知られる人だが、本名は賢（まこと）この人も、真猿（まざる）、江東みどり、正直正太夫、緑雨酔客、登仙坊といった、別号を使った。

緑雨という号は、友人の政治小説家坂崎紫瀾（本名斌（まこと）女流社会運動家福田（景山）英子の保護者）が選んでくれたもので、坂崎は紅露情禪と緑雨醒客の二つを示したが、斎藤はその頃本所緑町に住んでいたもので、若葉のしずくということで緑雨とつけた。

江東みどりというのも、本所緑町にちなんだものである。また正直正太夫というのは、この人伊勢の生れなので「伊勢音頭恋寝刃」の役名にちなんだのである。

恩義を受けた人の名前をもじって号にしている人もいる。いかにも明治らしい。

その一人は饗庭篁村（一八五五～一九二二）。本名は与三郎。別号に、龍泉居士、太阿居士、竹の屋（舎）主人があるが、篁村というのは、早く生母に別れ、下谷龍泉寺の質商竹村某に助けられ育てられたので、篁村とつけた。

江見水蔭（一八六九～一九三四）は、本名は忠功だが、この人は岡山県の出身で、水原という叔父がいて、その人に大変世話になった。つまり水原のお蔭で今日ありということから水蔭とつけたということである。なお、怒濤庵、骨法子、角燈子、半翠隱士、水蔭亭雨外などの号も用いた。

土地にちなんで

前項に書いた尾崎紅葉や斎藤緑雨のように、生れた場所、ふるさと、あるいは住んだ土地にちなんで号をつけた人もかなりいるようだ。

旅の歌人、紀行文家として有名な大町桂月（一八六九～一九一三）は、本名芳衛だが、土佐の高知の生れなので、

「御畳瀬（地名）見せましょ浦戸（地名）を明けて月の名所は桂浜（地名）」という郷里の俗謡からとった。桂浜は月の名所として知られるところである。又、自ら桂浜月下漁郎とも称した。

岩野泡鳴（一八七三～一九二〇）は、本名美衛だが、兵庫県津名郡洲本町、つまり淡路島の洲本の生れなので、阿波の鳴門をもじって泡鳴とした。初期には白滴子（これも泡の感じである）、また、阿波寺鳴門左衛門といったごついペンネームも使った。

正宗白鳥（一八七九～一九六二）は本名は忠夫だが、母親の郷里讃岐国白鳥しらとりからとった。もっとも岡野他家夫氏は、『明治の文人』（雪華社）という本の中に、

「白鳥という号は、ふかい因縁のあったというのでなく、ただ英語のスワンから思いついただけである、ということであった。『何処へ』の作者らしく、号なんていうものはなくてもいいのだが、文壇の常套に従って用いているにすぎない。はくちょうという音が、噓くまのハクシヨと似かよって、何でこんな馬鹿な号をつけたことかと後悔している、と彼自身何かに書いたこともあった」と書いている。

他に、白丁、はくてう。劍菱、三木庵主人、影法師、XY、XYZ、複面論士、四丁生、劍堂小史などの筆名、匿名を使った。

田口掬汀（一八七五～一九四三）は本名鏡次郎だが、郷里秋田県に鱒瀬川（かじなま）という川があつて、二十歳前後の頃、春夏の好天氣の日に、彼はその川岸の稲荷の祠に出かけて、本を読んだり文章を学んだりしたものだ。飽きがくると、流れて顔を洗い、口中の熱をすぎ去って、また勉強にとりかかった。行末何になる身かわからぬけれど、汀々掬んで勉強したという追憶が、生涯忘れられぬ記念だと思われて、それで自分の号を掬汀とした次第であるということであつた」（同前）

因みに掬汀の子が画家の田口省吾であり、その子田口哲郎が芥川賞作家高井有一である。

室生犀星（一八八九～一九六二）は本名照道だが、郷里金沢の犀川のほとりに生れたので犀星と号した。別に魚眠洞とも号した。

北村透谷（一八六八～九四）は、本名門太郎で、小田原の生れだが、六つの時東京に出て、銀座数寄屋橋の近くに住んだので（小学校は泰明小学校）透谷（すきや）としゃれたのである。

また私の父巖谷小波（一八七〇～一九三三）は本名季雄、生れは東京だが、その父一六の郷里が滋賀県水口なので、滋賀の枕ことば「さざなみ」からとつた。初めの頃は漣山人、大江小波、また恋川綾町などの筆名をつかつた。漣山人を使つていた頃、「しずく山人」と読まれてがっかりし、小波とかえたら、今度は、「こなみ」と呼ばれてまたがっかりしたという話がある。